

Title	序：アメリカへの批判的視点とは何か
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.18, 2000.11 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3460
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序 — アメリカへの批判的視点とは何か

聖学院大学総合研究所長 大木英夫

今度聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究所にドクター・コースが開設されることになるが、そこで目指していることのひとつに、アメリカへの批判的視点の確立ということが含まれている。それは、日本のナショナリズムに依拠したやや感情的な反撥とは何の関係もない。全く違った独特な知的作業である。「アメリカは契約概念をもつて成立した社会であり、本質的に神学的な国である」、これはわたしが早くから言っていたことであるが、日本では奇異な印象を与えてきたようであった。しかし「契約」概念の意味を、ベラーたち社会学者集団が発見した。そのグループのひとり William Johnson Everett は *God's Federal Republic: Reconstructing Our Governing Symbol* (1988) という書を出した。この契約概念がベラーの言う *the central religious and political symbols of our tradition* であるならば、アメリカへの批判的視点は、神学的なものとならざるを得ないはずである。

日本の大学における神学研究の欠如は、このような視点の構築を不能にしてきた。しかし、聖学院大学大学院はそれをもっている。アメリカのキリスト教的伝統を受け継いでいる大学である。だから

こそ、もしそこに神学研究の自立があれば、かえってその伝統の根幹を批判的に検討し、その意味と問題とを見極めることができる。そのことによつて、アメリカを深く理解し、アメリカとの関係をも考えることができる。それがこれまでの日本には欠落していた視点であつた。

しかし、それは日本をも神学的に批判することのできる視点である。日本には、アメリカにおいて中心的となつたその理念がない。だから、アメリカへの神学的批判は、ひるがえつて日本への神学的批判とならざるを得ない。それは、日本をトータルかつラディカルに取り扱う「日本の神学」、つまり日本的なものに *incestuous* (訳は「近親相姦的」だがここでは性的な意味でなく用いる) な知性ではなく、それを対象化して神学的に批判考察する神学でなければならぬ。それはすでに古屋教授とともに『日本の神学』(一九八九)を書いたときに開始された。新世紀は、このドクター・コースの設置とともに、この課題をあらためて追求し続けることになる。